

21世紀に向かって —子供たちに海とのふれあいの場を—

香良洲漁業協同組合青壮年部
部長 長谷川 静生

1 地域と漁業の概要

香良洲町は三重県の中部に位置し、県内でも有数の河川である雲出川の三角州に古くから漁業と共に栄えてきた人口約 5,300人の町である。(図1)

私たちの所属する香良洲漁業協同組合は正組合員332名、准組合員76名の合計 408名で、主な漁業種類は小型底びき網、船びき網、刺網などである。

平成10年の生産量は約2,300t、生産額は1億9,700万円であった。(図2)

2 グループの組織と運営

香良洲漁業協同組合青壮年部は平成元年に設立し、現在は8名の部会員で組織されている。活動資金は年会費と組合からの助成金、さらに地びき網での収益金等によって賄っている。

3 実践活動課題選定の動機

青壮年部の主な活動は、発足当時から、伊勢湾環境の悪化により年々資源が減っていることを懸念し、陸域から流れ込む生活雑排水を少しでも改善しようと環境保全への取り組みからスタートした。当初は、潮干狩りと海水浴シーズン前の年2回、砂浜と漁港付近の清掃を全員で、また潮干狩り期間中の休祭日には料金の徴収をこれまで交代で行っていた。

(写真1) また、このような地域活動を展開していく中で、地域住民との交流も徐々に深めていった。しかしこのような活動は別に青壮年部でなくてもできることで、漁協青壮年部だからこそできる活動をしたいと以前から考えていた。

平成9年には、より効果的な環境保全活動を展開していくため、広域的な全県規模の取り組みが必要と考え、県下漁協青壮年部組織として、「三重漁民の森」をつくることを漁連に提案した。以前から、森が海にもたらす恩恵を実感しており、県民に広く啓発していくことが海を守ることに繋がると考えていたからである。以降、三重県でも植樹運動が定着し、青壮年部も毎年参加することになった。(写真2)

さらに、地域住民との交流を続けていく中で、直接的な地域振興の活動として、当青壮年部ができる単独の事業を検討していた頃、3年前の総会で部員の中から「最近、海で遊んでいる子供が少なくなった」という声が出た。確かに自分たちが子供の時は釣をしたり、泳いだりして暇さえあれば海や浜で一日中遊んでいた。平成11年の夏に香良洲町にも町営の立派なプールができたので一段と子供たちが海と接する機会が少なくなりそうです。そこで子供たちがもっと海とふれあえる場を提供していくことを青壮年部の活動にしていこうと話をまとめた。

しかしいざ何をするかとなるとなかなか良い案ができません。そこで全国で海をメインにしているイベントを調べて見ると、祭りや漁業体験など様々な催しが行なわれていた。これらのほとんどは町や観光協会等との共催であったり、また青壮年部が単独でしているところは部員数がかなり多く、私たちのような少人数で行なっているところは少なかった。

ある時、4年前から観光地びき網をしている香良洲漁協の高齢者グループから、最近力作業の面で高齢者だけではどうしても運営が困難になってきているので、青壮年部に協力してほしいと言われた。何するか行き詰まっていた私達にとって願ってもないことであった。

4 実践活動状況

① 環境保全の取り組み

三重県での「森と海をつなぐ活動」は、三重県漁連が中心となって平成9年からスタートした。平成9年11月には、三重・愛知・岐阜3県の漁業関係者が岐阜県白鳥町のスキー場跡地に3,000本の苗木を植樹した。また、平成10年3月には宮川上流に苗木を1,000植樹し、「三重漁民の森」と名付けた。以降年2回、植樹運動が展開されているが、この事業の開始当初から当青壮年部は毎回積極的に参加している。

② 観光地びき網

平成10年の5月から高齢者グループと共に地びき網を行なうことになった。地びき網は前もって私達が網をセットしておき、料金に応じて魚を網の中に入れたものを曳いてもらう方式をとっている。(写真3)お客さんは県内の子供会、企業の親睦会などが多く、ほとんどの人が地びき網をするのは初めてである。地びき網は左右の綱を同じスピードで曳かなければうまくいかないが、子供たちは少しでも早く魚を見たいという気持ちと綱引きをしている感覚があるみたいで、いくら注意しても競争するように綱を引き私達を困らせる。(写真4)魚を捕まえる時になると小学生の男の子は目を輝かせ、砂まみれになりながら、たくさん捕まえようと頑張っている。一方、女の子の中には初めは怖がって逃げ回っている子もいるが、みんなが嬉しそうに魚を捕まえているのにつられて、最後には小さい魚ならどうにか触れるようになる。(写真5)今年の夏、小学校2年生ぐらいの男の子に魚を捕まえた感想を聞くと「今日初めて生きてる魚を触ったが、魚って手でつかむとピクピク震えるんだな」と驚いた顔をして話してくれた。たくさんのお客さんが「とても楽しかった、またやりたい」、「今度はもっと大きな魚をつかまいたい」といって喜んで帰る姿をみると私達も本当にやって良かったという気持ちになる。

③ 水産少年教室

昨年、県の普及員さんから今度地元の香海中学校の2年生46名を対象に水産教室を開催するので青壮年部に地びき網をしてほしいと要請があった。日頃から地元の子供たちに前浜のすばらしさを知ってもらいたいと考えていた私達にとって願ってもないことであった。

水産教室は7月27日に決まり、地びき網に入れる魚を用意することになった。最初の打ち合わせの時、いつものように魚を前もって入れるのはやめて、実際にそのとき浜にいる魚を捕まえたほうが子供たちの勉強になるのではないかという案がでた。しかし7月の下旬頃は毎年貧酸素の影響で浜には魚がいなくなり、網を曳いても魚が入らなったらお

もしろくないだろうということで、香良洲の近くで取れる魚だけを入れることに決まり、部員全員が手分けして集めることになった。

あいにくも水産教室当日は台風の影響で波が高く地びき網は中止となり、子供たちに香良洲の海の良さを知ってもらう良い機会であったが残念な結果となった。やる気になっていた私達は、普及員さんをお願いして地引き網に入れるのに用意していた魚の中からセイゴとマゴチを使って魚のおろし方を教えることにした。今回は時間の都合で魚を3枚におろし、皮をひくところまでとした。(写真6)さすがに中学生になると魚を怖がる生徒はいなかったが、魚をおろすのは初めてという生徒が多く、さらに詳しく聞いてみると魚をおろしていない家庭が半数近くあることに驚かされた。

5 波及効果

「森と海をつなぐ運動」に参加したことにより、宮川森林組合、白鳥町の林業関係者、さらに一般のボランティアの人達との交流を深めることができ、お互い業種は違うが、自然環境を大切にしようという気持ちは同じであることがわかった。今後、漁業者が山に木を植え、林業者が海浜を清掃するといったこの運動を一般の人達にも啓発することで、県民全体の運動として発展していくことを期待している。

これまで青壮年部員が全員集まることは年に2、3回しかなかったが、地びき網をすることによって頻繁に顔を合わすようになり、各自が考えていることを話し合える機会が増えた。

昨年9月に以前地びき網に来たお客さんから「今度小学生に伊勢湾の漁業について話をしてくれないか」と依頼があった。漁師にとって大勢の人の前で話すことは最も苦手とすることだが、日頃から漁業の実態についてたくさんの人に知ってもらいたいと考えていた私達だったのでやることにし、今回は部長である私が話をすることに決まった。

10月12日に津市の雲出小学校で5年生を対象に約1時間、伊勢湾の漁業と環境、漁業をして良かったこと、魚のおいしい食べ方など様々なことについて話をした後、30分間質疑応答を行なった。漁業の概要を話していた時はあまり興味がないような感じの子供もたくさんいたが、私の体験談になるとそれまで下を向いていた子供も真剣に聞いてくれるようになり、たくさんの質問が出てきた。後日、子供達から感想文が送られてきた。感想文には様々な感想といくつかの質問が書いてあった。(写真7) 一部を紹介しますと「今まで漁業にあまり興味がなかったが、話を聞いて漁業のことがよくわかった」、「海や川を汚さないようにします」中には「漁業をやりたい」などがあり、私にとって何事にも代えられない一言であった。これまで私は子供相手に話をしたことがなかったので、うまくしゃべれるか不安であったが、子供たちの生き生きと輝いた目を見ているうちにやって良かった思えてきた。これから機会があれば可能な限り講演はやって、1人でも多くの人に漁業のすばらしさを伝えていきたいと考えている。

6 今後の課題

今回水産教室に参加した46名のうち親が漁業をしているのは1人もいなく、おじいさんが漁師をやっているのが1人だけであった。私達の時は同級生の約半分くらいが漁師の家の子供であった。最近、子供の数が減ってきているから漁師の家の子供が少ないと

予想はしていたが、たったひとりとは思わなかった。確かに私達が子供の時は今では香良洲で1経営体になったノリ養殖も盛んに行なわれていて若い漁師がたくさんいた。現在、香良洲漁協所属の漁師で20代が2名、30代が6名しかいなく、新規就業者はここ数年まったくない。今の子供達が大人になった時に、はたして何人が漁師をしているだろうか。

水産教室が終了した時、校長先生から「今日は教科書では学べないことを体験できて良かった。できればこれからも継続して行なっていきたい」と言われた。このような行事は1年行っただけで結果がでるものではない。何年も続けることによって参加した子ども何人かでも大人になった時、この体験したことを思いだし、漁業という仕事を考えてくれたとき初めて結果がでたといえるのではないか。そのためには今やっている地びき網だけでなく、婦人部や町と協力しながら乗船体験や料理教室など子供達の心に残るイベントを行っていきたいと考えている。

現在地びき網に入れている魚は地元で全部を確保することができなく、半分くらいを他地区から仕入れている。少し前まで地びき網に魚を入れることなど考えもつかなかった。それだけ伊勢湾の環境汚染と資源量の減少が予想以上に進んでいるといえる。稚魚の保護育成などの資源管理について遅れている香良洲漁協であるが、これからは青壮年部が中心となって資源管理進めていき、将来は地びき網をすると魚がいっぱいで重くて曳けなくなるような資源豊かな海にしていきたい。

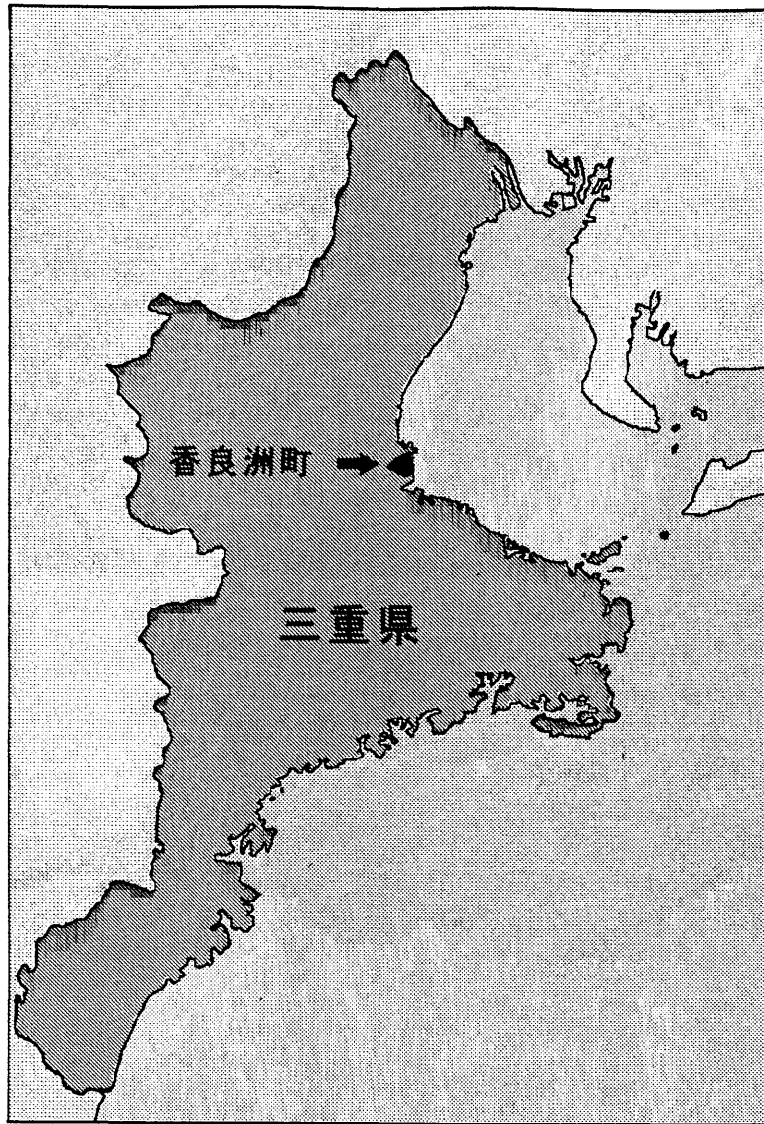


図1 位置図

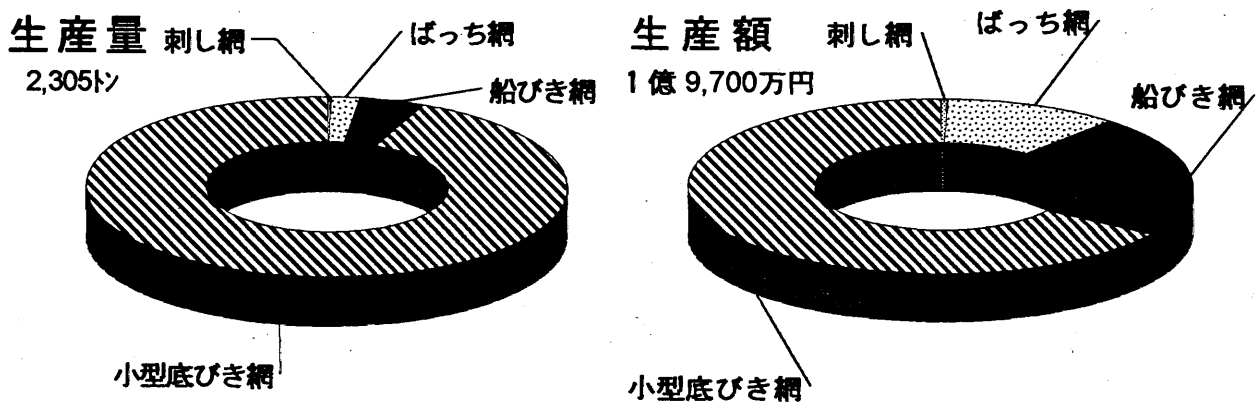


図2 香良洲漁業協同組合の生産量、生産額

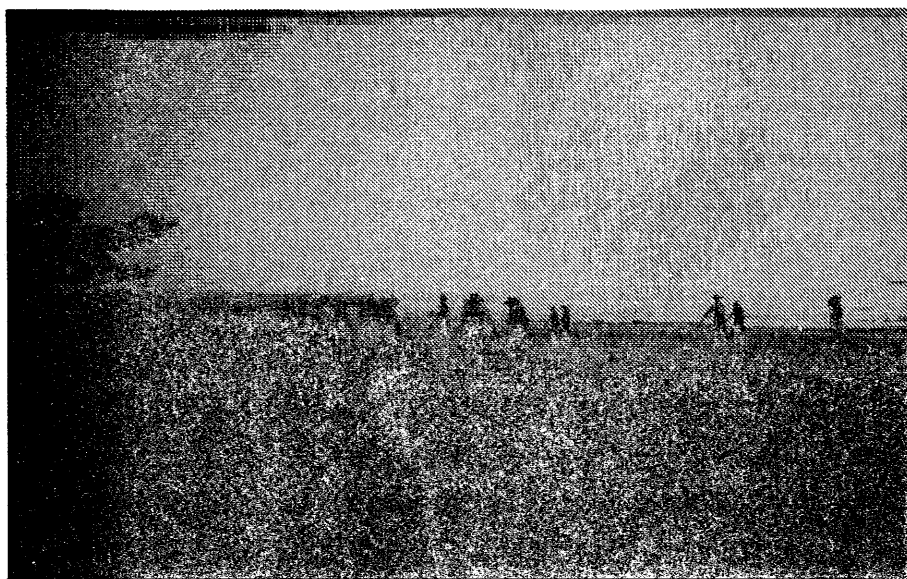


写真1 海浜清掃



写真2 植樹活動



写真3 地びき網準備

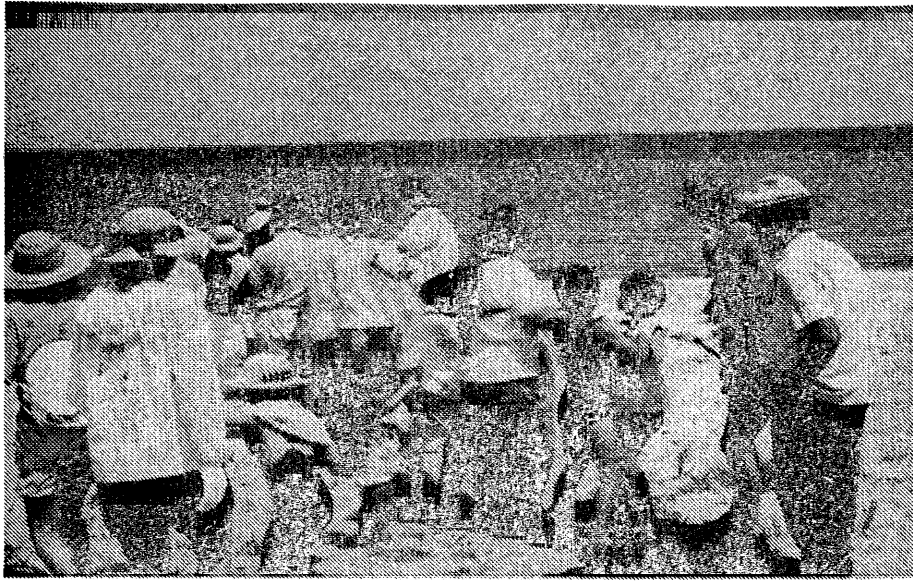


写真4 地びき網1



写真5 地びき網2



写真6 少年水産教室

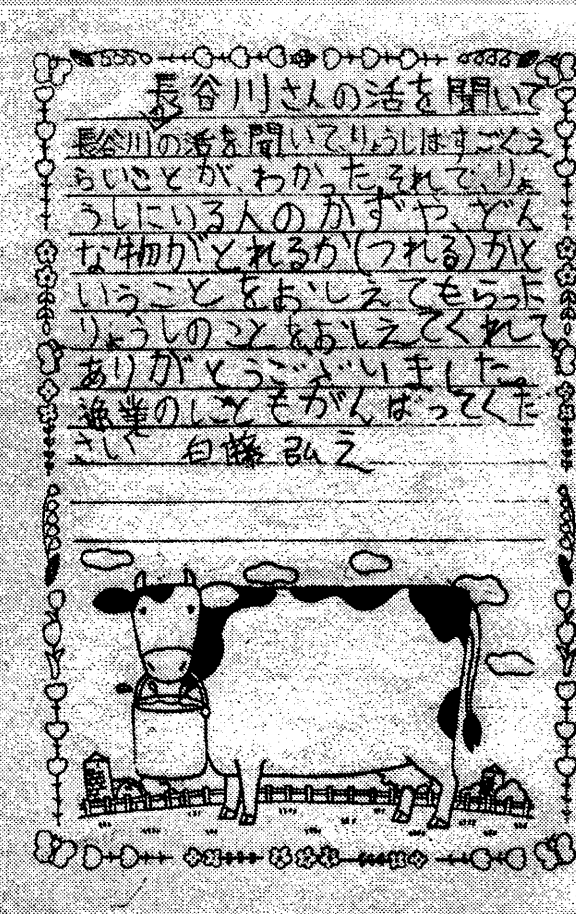
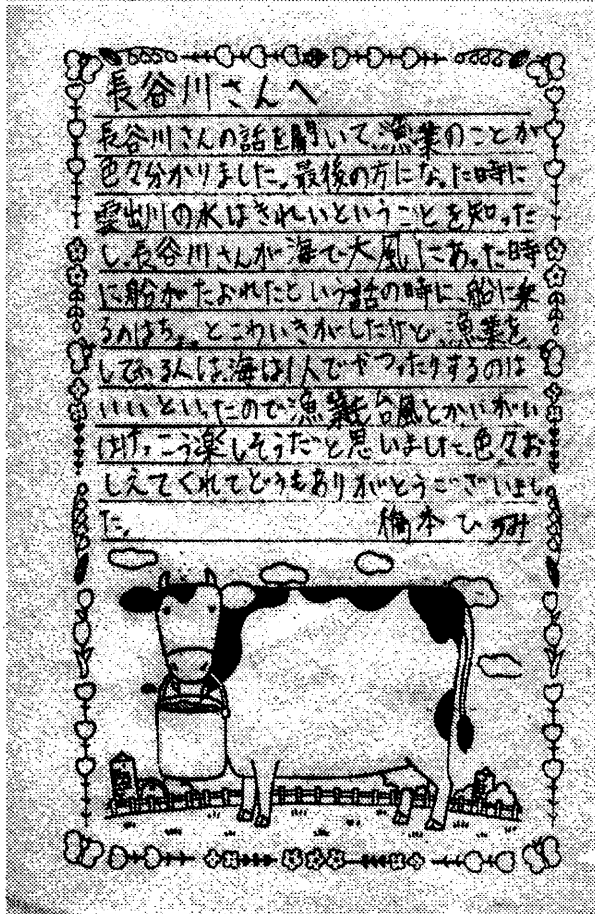
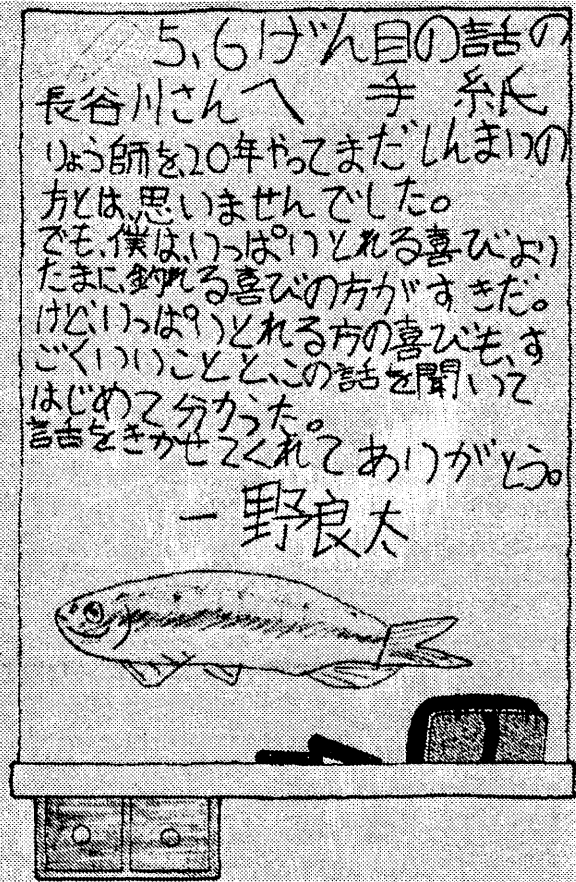
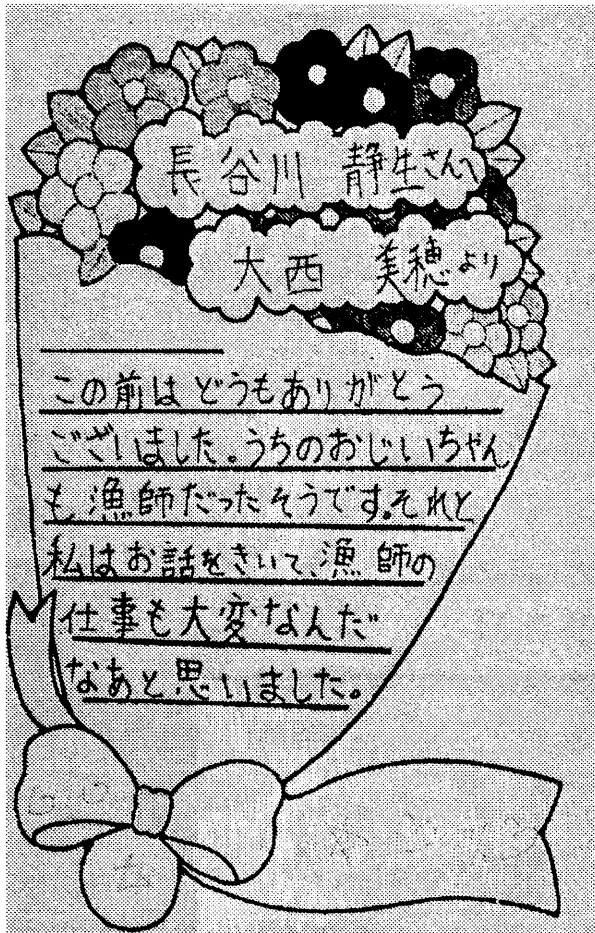


写真7 子供たちの感想文